

『詞学筌蹄』考論

張 仲謀
萩原正樹 訳

【凡例】

- 一、本稿は、張仲謀氏の論文「『詞学筌蹄』考論」（『中国文化研究』二〇〇五年秋之巻に掲載）を翻訳したものである。
- 一、引用文の後に、「」内に書き下し文、または現代語訳を附した。また本文中と注の「」には、訳者の補足を記した。
- 一、（ ）内の注は、原注である。

詞学家が詞譜について言及する際、これまではしばしば明・張綆の『詩余函譜』が最初の詞譜とみなされてきた。

たとえば、清初の著名な詞人である鄒祇謨の『遠志齋詞衷』では「張光州南湖詩余図譜、於詞学失伝之日、創為譜系、有韋路藍縷之功」^①〔張光州南湖の詩余図譜は、詞学伝を失なうの日において、創めて譜系を為り、韋路藍縷の功有り〕という。また現代の詞学研究者である唐圭璋先生は「研究詞体、詞調的著作、最早的是明人張縵詩余図譜三卷」^②〔詞体や詞調を研究する著作で最も早いのは、明人張縵の詩余図譜三卷である〕と述べられ、また宛敏瀛先生も「詞譜之作、当在詞樂失伝之後、始于明代的張縵」^③〔詞譜が起こつたのは、詞の音楽が伝承を絶つた後であり、明代の張縵に始まる〕と論じておられる。しかし、明清以来いわば定説とされていたこのような見方は、実は正しくなかつたのである。現存の最も早い詞譜は、張縵の『詩余図譜』ではなく、張縵よりほぼ半世紀前の人である周瑛の『詞学筌蹄』である。

一、『詞学筌蹄』の編者周瑛について

周瑛（一四三〇—一五一八）は、字を梁石といい、蒙中子、白賁道人と号した。また晩年は翠渠と号し、弟子たちは翠渠先生と呼んだという。福建莆田の人。景泰四（一四五三）年、鎮海衛の学生であつた時に郷薦に応じ、試験官であつた聶大年はその文を見ておおいにこれを奇とし、詩経第二に置いた。しかしその後何度も礼部の試験（会試）を受験したが、合格できなかつた。成化五（一四六九）年、四十歳の時になつて、ようやく張升の榜において第二甲の進士となることができた。成化七（一四七二）年には広德州の知事となり、同十六（一四八〇）年には南京礼部儀制司郎中に遷る。また同十九（一四八三）年に撫州の知府となり、調せられて鎮遠の知となつたが、親の面倒をみるためにいったん帰郷した。弘治の初め、吏部尚書の王恕の推薦によつて四川参政となり、後に四川右布政使に進んだ。晩年は家居して学問に専念し、多くの著述を残している。正徳十三（一五一八）年に八十九歳で没した。『明

史』本伝には「正徳中卒、年八十七（正徳中に卒す、年は八十七）」というが、これは誤りである。周瑛と同郷の友人である林俊の『見素集』巻十九に「翠渠周公墓誌銘」が収められており、そこには、周瑛は八十九歳の時に病気によって亡くなったが、その年月日は正徳戊寅（一五一八年）七月八日であったと記載されているからである。周瑛の事跡は、『明史』巻二八二「儒林伝」、『明儒学案』巻四十六、および四庫全書本『翠渠摘稿』の末尾に附されている鄭岳撰の本伝等によって見る事ができる。

周瑛は、理学家として『明史』「儒林伝」と『明儒学案』にその伝が収録されており、陳猷章（白沙先生）とは師でありまた友でもあるという関係であった。陳猷章の学問は「静」を主とし、一方周瑛は「学当以居敬為主、敬則心存、然後可以窮理（学は当に敬に居るを以て主と為す、敬なれば則ち心存し、然る後に以て理を窮むべし）」と説いた。この二人の主張の違いから、張詡『陳猷章行状』では周瑛を陳猷章の門人であると称し、周瑛の末裔である周成は逆に門人ではなかったと力説しているが、これは四庫全書の『翠渠摘稿』の提要に「以二人之集考之、蓋始合而終睽者、詡与成之説皆各執其一偏云^④（二人の集を以て之を考えれば、蓋し始めは合するも終には睽く者ならん、詡と成との説は皆な各の其の一偏を執ると云う）」と言っている通りであろう。

周瑛の著述は、その自撰の『壙志』、林俊撰「墓誌銘」および本伝によると、『経世管鑰』『律呂管鑰』『地理著龜』『周易参同契本義』等があつたが、現在はずべて伝本を見ることができない。その詩文別集について、『自撰蒙中子壙志』は『閩川稿』『桐川稿』『臨川稿』『金陵稿』『金台稿』等若干種があつたという。これらはおそらく、任期が終わるたびに一集ずつまとめられた小集であつたのであろう。林俊「翠渠周公墓誌銘」では『翠渠集』があつたというが、これはそれら小集をまとめ合わせた詩文集の名称である。いま伝わっているのは四庫全書本『翠渠摘稿』七卷補遺一卷で、「提要」では「所著詩文集曰翠渠類稿。此本乃其門人林近龍選録付梓、故曰摘稿（著わす所の詩文集を翠渠類

稿と曰う。此の本は乃ち其の門人林近龍の選録して梓に付せしものなり、故に摘稿と曰う」と述べている。案ずるに、林近龍は周瑛の門人であり、後にはその婿となった。また近龍は周瑛の友人・林俊の同族の孫であり、林俊が「翠渠周公墓誌銘」を書いたのも林近龍の要請による。また「補遺」一卷には、説三篇、序一篇、詩十八首が収められているが、これは康熙四十七年に周瑛の七世の孫である周鏞が家譜の中から『摘稿』の遺漏として補ったものである。

周瑛にはまた別に『書纂』という全五巻の書法に関する著作があり、『明史』『芸文志』に著録され、また『四庫全書総目』の子部芸術類では「存目」に収められている。提要は「分原始、弁体、考法、会通、扞佐使五篇。原始篇論六書、弁体篇論古、籀、篆、隸、草、八分、飛白諸体及歷代沿革、考法篇論手法、筆法、書法、会通篇論諸家書、扞佐使篇論筆墨紙硯。大抵掇拾旧文、故名曰纂。自序称其長孫南鳳年十有一、作書以授之、故所錄多淺近易明云」⁵⁾原始、弁体、考法、会通、扞佐使の五篇に分る。原始篇は六書を論じ、弁体篇は古、籀、篆、隸、草、八分、飛白の諸体及び歴代の沿革を論じ、考法篇は手法、筆法、書法を論じ、会通篇は諸家の書を論じ、扞佐使篇は筆墨紙硯を論ず。大抵旧文を掇拾す、故に名づけて纂と曰う。自序に其の長孫南鳳年十有一、書を作りて以て之に授くと称す、故に録する所多く浅近にして明らかなり易しと云う」とその内容について述べている。ただ『書纂』という書名は本伝や諸家の記載に見えず、周瑛自撰の『壙志』や鄭岳撰の本伝、また林俊の墓誌銘では『字学纂要』という書物があることを伝えている。この『字学纂要』と『書纂』とはおそらく同一の書であり、書名が異なるだけであろう。

周瑛は理学家として著名であり、詩文に観るべき作品が少ないため、『明史』では「文苑伝」ではなく、「儒林伝」に入れられている。しかし、鄭岳の本伝では「文章渾深雅健、有根柢。詩格調高古、字画初学晦翁、变为奇勁」(文章は渾深雅健にして、根柢有り。詩は格調高古にして、字画は初め晦翁を学び、変じて奇勁を為す)と述べ、その詩文や書を高く評価している。朱彝尊の『明詩綜』、沈德潜の『明詩別裁集』、鄭王臣の『莆風清籟集』など、いずれも周瑛の楽

府「履霜操」を載録し、その言葉が怨みを含んでいても怒っておらず、韓昌黎の誤りを正すにたる作品であると称している。^⑥ 陳田の『明詩紀事』丙籤卷六は周瑛の詩五首を収録し、「詩擬古音節極合、律絶亦饒風趣（詩は古音節に擬して極めて合し、律絶も亦た風趣饒し）」という。『翠渠摘稿』卷六「樂府」類にはその詞七首が録されているが、そのうちの四首は林俊（見素）との唱和の作であり、二人の交情の厚さが窺える。『詞学筌蹄』の序文が林俊だけに依頼されたというのも、二人の交情の厚さからすれば当然のこととうなずけよう。筆者はかつて拙著『明詞史』（人民文学出版社、二〇〇二）において、周瑛の「滿江紅 寓南都題西園池亭、用宋僧晦庵警世韻（滿江紅 南都に寓して西園の池亭に題す、宋僧晦庵の警世の韻を用う）」詞一首を引き、その詞中に「譬如車輪三十幅、迭為上下交翻覆（譬へば車輪の三十幅の如く、迭いに上下して交も翻覆するを為す）」「器小不能勝大受、命窮豈足膺多福（器小さければ大受に勝ふること能わず、命窮まれば豈に多福を膺くるに足らんや）」などの句があることから、彼の詞を「講義語録の押韻したもの」と論じたことがある。当初は周瑛の詞をいわゆる「理字体」としてとらえるのが妥当であると考えていたのだが、いまじっくりと彼のその他の諸詞を見てみると、その詞句には情趣が感じられ、必ずしも一概には否定できないように思う。理学家でありながら詞譜を編纂しようと考えた事実自体が、周瑛がきわめて典雅で風流な趣味を持つていたことを示しているよう。

二、『詞学筌蹄』の詞譜としての性質

『詞学筌蹄』という書が有する主な価値とその詞学史における意義は、それが我々の知る範囲で、また現存している書の中で、最初の詞譜であるという点にある。この結論を導き出すためには、まずその詞譜としての性質を証

明する必要がある。

一般的に言つて、詞が依拠する譜には二つの種類がある。一つは音譜であり、即ち楽曲譜である。唐宋人は詞を作る際、音譜に依拠していた。劉禹錫の「和樂天春詞〔樂天の春詞に和す〕」詞の小序に「依憶江南曲拍為句〔憶江南の曲拍に依りて句を為る〕」とあるのは、音譜に従つて詞を作つていた例である。張炎の『詞源』に「音譜」条があり、また周密『齊東野語』卷十に、南宋時代に『樂府混成集』が編纂されたことを述べて「古今歌詞之譜、靡不略具〔古今の歌詞の譜、略ぼ具わらざる靡し〕」と言っているのも、すべて楽曲譜を指している。姜夔の『白石道人歌曲』十七首に附されている旁譜が、この楽曲譜の実例であろう。もう一種の譜は、狭義の詞譜であり、すなわち詞を作る際に依拠すべき声調譜である。その基本的な形式は、広く各種の詞調を載録してそれぞれの調の句法、字数や平仄をさぐり、定格を決定して「調有定句、句有定字、字有定声〔調に定句有り、句に定字有り、字に定声有ら〕」〔明・徐師曾『文体明弁序説〕しめる働きをもつものである。通常、詞譜という場合はこの後者を指し、まさにこの意味において、『詞学筌蹄』は我々の知る範囲で、また現存の書物の中で最初の詞譜であると言えるのである。

『詞学筌蹄』は刊本の存在は知られず、ただ抄本のみ流传した。^⑦鄭岳の本伝と林俊撰「翠渠周公墓誌銘」とが『詞学筌蹄』について言及している以外、明代以来の書目においてこの書を著録しているものは非常に少ない。管見によれば、わずかに下記の諸書に見えるのみである。

一、黄虞稷『千頃堂書目』

卷三十二「詞曲類」に『詞学筌蹄』の書名を著録するが、撰者名や巻数は記載していない。著録箇所における時代の先後を見るに元代の書として記入しており、おそらく『詞学筌蹄』の編者も成書の時期も、よく分からなかつ

たのであろう。

二、唐圭璋先生『全宋词』

巻首「引用書目」「詞譜類」の冒頭がこの書であり、「詞学筌蹄八卷、明周瑛撰、明抄本、上海図書館蔵」と著録する。

三、『中国古籍善本書目』（集部）

「詞類」「詞譜」に、「詞学筌蹄八卷、明周瑛輯、清初抄本」と著録する。

四、王洪主編『唐宋词百科大辞典』

「詞学専論・詞韻」の部に『詞学筌蹄』の条があり、蔣哲倫氏が執筆されている。蔣氏は「詞譜。明周瑛撰、明蔣華編録、明徐楠考正。明弘治九（一四九六）年藍格抄本、有弘治七（一四九四）年周瑛序及弘治九年林俊序……」^⑧。「詞譜」と述べられており、これはこれまでで最も詳細な記述である。なお、ここでは「明・弘治九年藍格抄本」と記されているが、唐圭璋先生『全宋词』の「明抄本」とこの「弘治九年藍格抄本云々」、また『中国古籍善本書目』が著録する「清初抄本」の三種は、実はすべて同一の書物であり、ただ抄写時期についての判断が異なっているだけであらう。

五、王兆鵬・劉尊明主編『宋词大辞典』

「研究著作」類に『詞学筌蹄』条を載せる。内容は基本的には右記の『唐宋詞百科大辞典』と同じである。^⑨

六、また、清初の褚人獲撰『堅瓠集』に『詞学筌蹄』を引いて、「詞学筌蹄載楊陰樵人影詞尤佳。只道空花云云（詞学筌蹄に載す楊陰樵の人影詞尤も佳なり。只だ道う空花、云々）」と見えている。^⑩ただ、この楊陰樵「人影詞」の詞調は「滿庭芳」であるが、いま伝存している抄本『詞学筌蹄』巻八の末尾に「滿庭芳」が見え、詞六首を収めているもの、この楊陰樵詞は録されていない。それが褚人獲の誤記によるのか、あるいは現存抄本の抄写漏れであるのか、いまのところよく分からない。しかしこの『堅瓠集』の記事は、『詞学筌蹄』が抄本でありながら、清初の当時において使用され、また引用した人がいたという重要な事実を示している。

現在一般の読者が簡単に見ることのできる『詞学筌蹄』は、上海図書館所蔵抄本を影印した『統修四庫全書』本であろう。上海図書館所蔵の原本は、匡郭の高さが二二二ミリ、横が三〇〇ミリ、半葉十行、各行二十字、正楷書体で大変丁寧に抄写されている。巻首には弘治九（一四九六）年に書かれた林俊『詞学筌蹄』序文がある。林俊もいくつかの詞を作ってはいるが、決して得意ではなかったようだ。本序文中において詞の形式の変遷を「詞始于漢、盛于魏晉隋唐、而又盛于宋、即所謂白雪体者（詞は漢に始まり、魏晉隋唐に盛んにして、又た宋に盛んなるは、即ち所謂白雪体なる者なり）」と大仰に論じているが、詞を漢魏の樂府詩と混同している上に、いわゆる白雪体とは何を指して言っているのか不明であり、すなわち本序文は、詞を知らないのに強いて詞を説くものであって、取るに足りないと言わざるをえない。林俊序の次に掲げられているのが、弘治甲寅（一四九四、林俊序の二年前）の周瑛自序である。この自序において周瑛は、本書の体例の特徴を「草堂旧所編、以事為主、諸調散入事下。此編以調為主、諸事并入調下。

且逐調為之譜。圓者平声、方者側声、使學者按譜填詞、自道其意中事、則此其筌蹄也〔草堂の旧と編する所は、事を以て主と為し、諸調散じて事の下に入る。此の編は調を以て主と為し、諸事并びに調の下に入る。且つ調を逐いて之が譜を為る。圓なる者は平声、方なる者は側声、学ぶ者をして譜を按じて詞を填し、自ら其の意中の事を道わしむれば、則ち此れ其筌蹄ならん〕と説明している。按ずるに「筌蹄」という語は、『莊子』「外物篇」の「筌者所以在魚、得魚而忘筌。蹄者所以在兔、得兔而忘蹄〔筌は魚を在うる所以、魚を得て筌を忘る。蹄は兔を在うる所以、兔を得て蹄を忘る〕」に基づくものであろう。「筌」はもと「筌」に作り、魚を捕るための道具であり、また「蹄」は兔を生け捕る道具であつて、後に「筌蹄」は目的に到達するための手段や道具という意に喩えられる。すなわちこの『詞学筌蹄』という書名からは、初学者に、譜に従つて詞を作ることを教え導く機能を持つ道具としようという意図を読み取ることができ、既に一般の総集とははつきりと区別していることが分かる。また周瑛と林俊の序文によれば、この書の編録は四川府学教授の蔣華(質夫)が行い、考正には蜀の人である徐楠(山甫)が当たつたという。弘治初年、周瑛はちょうど四川右布政使の任にあり、したがつて蔣、徐の二氏も喜んでその仕事を担当したのである。このことからすれば、周瑛は企画立案と主編の役割を担つただけで、具体的な編集校訂作業は蔣華、徐楠の二人が行つたのであろう。

『詞学筌蹄』はすべて八巻、周瑛の自序では「凡為調一百七十七、為詞三百五十三〔凡そ調たるは一百七十七、詞たるは三百五十三〕」と称しているが、実際には目録中の詞調の順序とそれぞれの調の収録作品数にはいずれも若干の誤りがあり、抄本によつて統計してみると詞調は一七六調、作品数は三五四首となる。具体的な状況は左表の通りである。

巻次

詞調数

詞作篇数

備

考

第一卷	20		目録では41首とする
第二卷	26		目録では30首とする
第三卷	23		
第四卷	22		
第五卷	20		
第六卷	28		
第七卷	15		
第八卷	22	37	

『詞学筌蹄』の詞譜としての性格が最も際立っているのは次の二点である。

(一) 詞調を基準に排列し、同じ詞調を重複させない点。

周瑛の自序に、『草堂詩余』等の古い詞選が「以事為主、諸調散入事下（事を以て主と爲し、諸調散じて事の下に入る）」と述べるが、この「事」とは、作品の基となった事実や具体的な叙述内容を指すのではなく、「春恨」や「秋感」などといった類型化された題材を指している。実は、通常の詞の選本は往々にして詞人別に編纂してその佳詞を選録するという体裁を取るのだが、題材ごとに分類して編集するという詞選のスタイルは『草堂詩余』がはじめて試みたものであり、それがまた明代に『草堂詩余』が流行した大きな原因ともなった。『詞学筌蹄』の他の詞集とは異なる独創的な点は、『草堂詩余』の分類編纂方式を踏襲しなかつたという点にあるのではなく、詞調別に編纂するという新たな体例を確立した点にこそある。分類編纂であればさまざまな詞調が混ざって排列されるが、詞調別の編纂だと同じ詞調が他の箇所にも重複して現れるということはないのである（ただし、『詞学筌蹄』中には同じ

詞調が重出する例があるが、これは誤謬であつて故意に重出させているわけではない。

(二) 視覚的な図譜の方法で所収の詞調の形式を示している点。

ある種の図式で各詞調それぞれの形式を表記しようとする考え方は、各詞譜が共通してもつ傾向と言つてよい。この図式には、おおむね三種類の方式がある。一つは『詞学筌蹄』の譜のように、「○者平声、方者側声〔○なる者は平声、方なる者は側声〕」という方法である。二つめは張綆の『詩余図譜』で初めて用いられた方法で、中が空白の丸を「平」、空白のない丸を「仄」、上半分が空白で下がつまつている丸を「もとは平だが仄でも可」、上がつまつて下半分が空白の丸を「もとは仄だが平でも可」とするものである。その後、陳廷敬等撰『康熙詞譜』や頼以邠の『填詞図譜』もこの方法を採用した。頼以邠の「凡例」では、半分空白で半分つまつている丸を「大約上半為現譜之音、下半為通用之法〔大約上半を現譜の音と為し、下半を通用の法と為す〕」と説明しており、これはおおまかに「可平可仄」というよりも、より正確な言い方であろう。三番目は最も簡便な方式で、龍榆生の『唐宋詞格律』〔上海古籍出版社、一九七八〕の譜式をその代表とする。すなわち、横棒が平声、縦棒が仄声、「十」字が平も可、「仄」も可、というものである。説明だけでは分かりづらいので、具体例としてそれぞれの詞譜がいずれも収録している「踏沙行」を挙げ、比較してみよう。

『詞学筌蹄』

○□○○・□○○□・○○○□○○□・□○○□○○○
○□○○・□○○□・○○○□○○□・□○○□○○○
○□○○・□○○□・○○○□○○□・□○○□○○○

な詞譜の図式を作り出したことには、充分な価値と意義を認めるべきである。後出のものがさまざまな例を比較参照して、以前よりもすぐれたものを作り出すのは、理の当然であろう。

三、『詞学筌蹄』が現存最初の詞譜であることについて

これまでは張縵の『詩余図譜』が最も早い詞譜であると考えられてきたのであるから、ここで我々が『詞学筌蹄』こそが現存最初の詞譜であると論じるためには、この二書の先後について考証しておかなければならない。

張縵の生卒年については、諸書に記載がない。錢謙益の『列朝詩集小伝』丙集は張縵について「正徳癸酉举人。八上春官不第、謁選為武昌通判。遷知光州、罷歸〔正徳癸酉の举人。八たび春官に上るも第せず、選に謁して武昌通判と為る。知光州に遷りて、罷めて歸す〕と述べる。『乾隆高郵州志』卷十は「張縵は十五歳で府学に遊学し、正徳癸酉八（一五一三）年に郷試に合格して举人となった。八回礼部の試験を受けたが合格せず、吏部の選に応じて武昌通判となる。また光州の守となったが、湖南の布政使や按察使が張縵を仕事を怠けて吟詠に耽っていると誣告したため、官を捨てて帰郷した。南湖で読書し、五十七歳で亡くなった」という。また張縵と同郷である朱日藩が嘉靖庚子（一五四〇）に書いた『南湖集序』には「去年秋、先生嗣子惟一刻先生全集成、持過涇上、以序見属。集自弘治辛酉、迄嘉靖庚子、編年分類、凡四卷〔去年の秋、先生の嗣子惟一先生の全集を刻して成り、持して涇上に過りて、序を以て属せらる。集は弘治辛酉より、嘉靖庚子に迄び、編年分類して、凡て四卷なり〕と述べている。張縵の詩文集に収められている作品の下限が嘉靖庚子十九（一五四〇）年であることからすれば、あるいはこの嘉靖十九年が張縵の卒年であるとも考えることができよう。『乾隆高郵州志』の小伝に「年五十七卒〔年五十七にして卒す〕」と言っているので卒年から逆算すると、張

縦は成化二十年甲辰（二四八四）に生まれ、詩文集収録作品で最も早い弘治辛酉（二五〇二）の年にはちやうど十八歳、正徳八年癸酉（一五二三）に郷試に合格した時は二十九歳である。八回礼部の試験を受けたが合格しなかったと言っている。吏部の選に依じて武昌通判となつたのはすでに五十歳に近い頃であつたであろう。もちろんこの生卒年は推測に過ぎず多少の前後があるかもしれないが、ただ誤つていたとしてもさほど大きな差はないと思われる。さきに見たように、周瑛の生年は明・宣徳五（一四三〇）年であり、張縦よりも五十四歳の年長である。また周瑛『詞学筌蹄』序は弘治七年甲寅（一四九四）に、さらに林俊の序文は弘治九年丙辰（一四九六）に書かれており、この時張縦はまだ総角の少年に過ぎなかつた。つまり、張縦の『詩余図譜』が吏部の選に依る以前に編まれたか、あるいは官を罷め帰郷後に編集されたか、いずれであつたにしても『詞学筌蹄』の成書よりも数十年ほど遅いのである。

四、『詞学筌蹄』に不足している点について

詞譜としてみると、『詞学筌蹄』に不足している主な点は、以下の四点である。

（一）詞と譜とが完全には対応していない点。

『詞学筌蹄』はそれぞれの詞調ごとにただ一種類の定型を表示するだけで、その詞調の別の詞型を「又一体」というかたちで提示しない。また譜で示される文字の平仄についても、ただ「平」「仄」を規定しているだけで、「平でも可」「仄でも可」という弾力的な幅を設けていない。一般に、ある詞調において一首の詞を選録した場合、この詞と詞譜とは形式が一致していなければならないが、『詞学筌蹄』はこのような基本的なことでさえできていな

いことがあり、正確さに欠けると言わざるをえない。またある詞調の作例として、格律上に種々の違いがある複数の作品を収録することがあり、この場合それらの作品はその詞調の「又一体」のサンプルとして提供される。だが『詞学笈蹄』においてはそうなっておらず、ただその詞調の優れた詞を選んでいるにすぎないのである。たとえば、「水龍吟」に九首、「玉楼春」に十首、「蝶恋花」に十一首、「浣溪紗」に十四首、「念奴嬌」では十五首が録されているが、これらの同調の詞においては変格のものも有るものの、すべての変格の詞型を包含しているわけではなく、すなわちこの『詞学笈蹄』の選録基準が、ただ詞の作品としての優劣にのみあつて、詞調の変型という要素ではないということを示している。逆に、複数の変格が存在するにも関わらず、ただ一首のみしか選ばれていないという詞調の例も多い。『詞学笈蹄』にはすべて一七六調が収録されているが、そのうち一二三調は一首しか選ばれておらず、この点からも、編者の念頭には、その詞調の変格や別調をすべて収録しようという意識がまったくなかったことが分かる。

(二) 詞調の排列が字面の類似によつており、詞の格律や宮調とは関連がない点。

通常の詞譜においては、詞調の排列には以下のような方式がある。一つは、張綬『詩余函譜』と清・頼以邠の『填詞函譜』のように、「小令」「中調」「長調」の順に並べるもの。二つめは、万樹の『詞律』、清康熙の『欽定詞譜』、舒夢蘭の『白香詞譜』のように、詞調の文字数の多寡によるもの。三つめは、清・謝元淮『碎金詞譜』のように、宮調によつて排列するもの。四つめは、龍榆生の『唐宋詞格律』のごとく、押韻の方式による分類で排列するもので、『唐宋詞格律』では、「平韻格」「仄韻格」「平仄韻通叶格」「平仄韻錯叶格」の五格に分けて排列している。以上四種、いずれの方式であっても、ある一定の論理で順序づけられていなければならず、それによつ

て検索しやすく、また排列の法則性を理解しやすくなるのである。ところが、『詞学筌蹄』における詞調の排列には、いかなる法則性も反映されていないのである。もし『詞学筌蹄』の編者に排列に関するなんらかの意図があったとすれば、それは詞調名の字面の類似であろう。たとえば巻一に収めるのはいずれも三字の詞調であるが、「瑞龍吟」「水龍吟」のように「吟」字を持つものを配し、また「武陵春」「沁園春」のように「春」字があるものをまとめて収録しているのである。このような、ただ類似した詞調名を集めるという排列方式は、編者が詞学についてはまったくの門外漢であるという事実をはっきりと示しているであろう。

(二) 多くの常用の詞調が載録されず、反対に僻調が多く載録されている点。

万樹の『詞律』に後人が補った「補遺」を合わせると所収詞調は八七五調、また康熙『欽定詞譜』には八二六調を収録するが、このうちほとんど用いられることのない僻調が約半分を占めており、実際に常用される詞牌は百余調に過ぎない。『詞学筌蹄』は一七六調を収録し、張縦『詩余函譜』の一四九調と比べるとやや多いが、どの調を選びどの調を選ばないかという点においては、張縦が詞調の通行状況を顧慮していたのに対して、『詞学筌蹄』ではまったく何の考えもなかったように思われる。『詞学筌蹄』がある詞調を選ぶ理由は、その調に素晴らしい詞があるからというものであった。このため、「憶江南」「漁歌子」「長相思」「破陣子」「朝中措」「漁家傲」などの常用の詞調は収められず、「燕春台」「華胥引」「西平樂」「玉燭新」等の僻調が多く入選することとなったのである。最も典型的な例は、「春霽」「秋霽」の二調である。「春霽」には宋・胡浩然の首句「遲日融和」詞一首を録し、「秋霽」は宋・無名氏の首句「虹影侵階」詞を、ここでは陳後主の作として載せている。後に述べるように『詞学筌蹄』は『草堂詩余』と関連が深いので、『草堂詩余』を検してみるとはたしてその後集巻上にこの二詞が見え、「秋霽」に

は陳後主の名が附されているのである。ちなみに、毛先舒の『填詞名解』には「秋霽之調、創自李後主。至宋胡浩然用此調作春晴詞、遂名春霽。又作秋晴詞、亦名秋霽、蓋一調（秋霽の調は、李後主より創まる。宋の胡浩然の此の調を用いて春晴詞を作るに至り、遂に春霽と名づく。又た秋晴詞を作り、亦た秋霽と名づく、蓋し一調なり）」とある。毛先舒は博学ではあるが、往々にして「英雄人を欺く」ようなことをする。李後主の詞には「秋霽」も「春霽」も存在せず、おそらく毛先舒は『草堂詩余』の「秋霽」詞に陳後主の名が記されているのを見て、陳後主は李後主の誤りであると思ひこみ、そこで簡単に作者を李後主と改めて、出処を明らかにしなかつたのだ。この毛先舒の説は、他に何か基づくところがあるのではないかと疑われたりもしたが、実際は彼の勝手な思ひこみであつたのである。『詞学筌蹄』が多数の常用詞調を漏らしていながら、「秋霽」「春霽」の一体を収録しているのは、ただ『草堂詩余』に従つてそのまま収めているだけであつて、編者の嗜好による選択とさえも言えないであらう。

(四) 同じ詞調が前後に重複している点。

『詞学筌蹄』の編者は、詞学を知らずただ字面によつて詞調を羅列し、また同調異名が有ることも知らなかつたので、同じ詞調が書物の前後に重複する例がかなり見られる。たとえば、卷一の「玉楼春」と卷二の「木蘭花令」、卷一の「慶春沢」と卷二の「高陽台」、卷三の「酹江月」と卷七の「念奴嬌」、卷七の「桂枝香」と卷八の「疏簾淡月」、卷五の「菩薩蛮」と卷六の「重疊金」など、これらはすべて同調である。反対に「攤破浣溪沙」（又名「山花子」と「浣溪紗」とはあきらかに異なつた詞体であり、同調とは見なすことができないのに、『詞学筌蹄』ではともに「浣溪紗」に編入するなど、まったく詞調が識別されておらず、重複と同様に不適切である。

五、『詞学筌蹄』と『草堂詩余』との淵源関係

以上に述べてきたように、『詞学筌蹄』は詞譜としても、また詞選としても、多くの欠点がある。これまで挙げたもの以外にも、たとえばある詞人の作品を別の作者の作としたり、作者名を名や字、号などバラバラに表記したり、字号のみ記して姓氏を加えていなかったり、また抄録している詞に欠落や乱簡があつたりなど、さまざまな欠点が見られる。だがたとえこれらの欠陥があつたとしても、これらが古い選本、特に明代の選本にはしばしば見られる誤りであることからすれば、大きな問題とまでは言えないのかもしれない。実はこれらの他にも、さらにいくつかの理解しがたい問題が有る。たとえば、『詞学筌蹄』において最も多く作品を収録されている詞人は周邦彦であり、その数は五十五首にのぼる。その理由はもちろん、周邦彦の詞が音律に諧っていて、模範とするに足るものであるからと解釈することができよう。だが、南宋後期の詞人である姜夔、吳文英、張炎、周密らについては、彼らもみな宋以後の詞選集の編者から評価の極めて高い詞人であるにも関わらず、どういうわけか『詞学筌蹄』には一首も載録されていないのである。姜夔の「暗香」「疏影」「揚州慢」はみなその自度曲であり、また吳文英の「風入松（曉風曉雨過清明）」「八声甘州（渺空煙四遠）」「鶯啼序（殘寒正欺病酒）」や、張炎の「南浦（波暖綠粼粼）」「高陽台（接葉巢鶯）」「解連環（楚江空晚）」等は、いずれも歴代の詞選や詞譜において選録される比率が非常に高い作品である。それなのにこれらの作品が『詞学筌蹄』ではまったく見られないということは、これはもはや周瑛らの嗜好による選択というだけでは理解することができないであろう。

周瑛とその幕客であつた蔣華と徐楠は、いずれも詞学の専門家ではなく、また彼らが生きていた時代も詞学が普

及していた時代ではなかった。このため、彼らが所蔵していたり実見することができた詞籍はかなり限定されたものであったと考えられる。さらに、このような状況にあった彼らが『詞学筌蹄』のようなある程度規模のある書物を編纂できたのは、なにか基づくところがあつたからではないかと思われるのである。この藍本として、最も可能性があるのは、周瑛が自序中で言及している『草堂詩余』である。はたして、ひとたび『詞学筌蹄』と『草堂詩余』とを対比して見比べてみると、『詞学筌蹄』に見えるさまざまの問題が難なく理解できるのである。

『草堂詩余』は南宋・何士信の編であり、陳振孫『直齋書錄解題』に既に著録されている。南宋・慶元年間に成立した王楙『野客叢書』が、『草堂詩余』所収として張仲宗『滿江紅』を引いていることから、『草堂詩余』は慶元年間（一一九五—一二〇〇）以前には存在していたことが知られる。このため『草堂詩余』中には、南宋後期の姜夔や呉文英ら諸名家の詞が選録されていないのである。『詞学筌蹄』が明代に編纂されているながら、これら南宋後期の著名な詞人の作品や彼らが作製した詞調を一つも選んでいないという事実は、周瑛らがただ『草堂詩余』を藍本としてその排列や体例を変えただけであつて、自らの見識で詞を選択しようという興味も能力もまったく無かつたことを示している。

『草堂詩余』の宋刊本は既に現存しておらず、明人の改編本は非常に多いが、そのほとんどは元の姿を失っている。周瑛が弘治初年に見ることのできた『草堂詩余』は、おそらく洪武二十五年壬申（一三九二）遵正書堂刻本の『増修箋註妙選羣英草堂詩余』前集二巻後集二巻であろう。『続修四庫全書』所収の『草堂詩余』は、上海図書館所蔵のこの遵正書堂刻本の影印である。『詞学筌蹄』と『草堂詩余』とは排列方式が異なり、選録されている詞調や詞人、詞作を完全に符合させながら全面的に比較対照していくのはいささか困難であるので、ここでは下記四点における対比を通して、両書の淵源関係を証明しておきたい。

(一) 『詞学笈蹄』 卷一所収冒頭十種の詞調に選録されている詞について。

左表のとおり、以下十調においては、詞題や詞作の順序や署名に若干の違いが有るだけで、両書に選ばれている同調の詞はすべて同じである。「海棠春」一首は、『草堂詩余』では作者の名前が無く、前の作品に秦少游と記されている。このため『詞学笈蹄』はこの「海棠春」を秦少游の作としているが、作者名が異なっているだけで作品は同一のものである。

序次	詞調	選詞数量	『草堂詩余』同調詞比較
1	瑞龍吟	1	一首選録、作者・作品すべて同。
2	水龍吟	9	九首選録、作者・作品すべて同。順番のみ異なる。
3	丹鳳吟	1	一首選録、作者・作品すべて同。
4	塞翁吟	1	一首選録、作者・作品すべて同。
5	武陵春	1	一首選録、作者・作品すべて同。
6	絳都春	2	二首選録、作者・作品すべて同。順番のみ異なる。
7	沁園春	1	一首選録、作者・作品すべて同。
8	漢宮春	2	二首選録、作者・作品すべて同。
9	海棠春	1	一首選録、作者・作品すべて同。作者名のみ異なる。
10	画堂春	2	二首選録、作者・作品すべて同。

(二) 入選詞人の作品について。

『詞学笈蹄』に入選している詞人を多い順に挙げると、周邦彦（五十五首）、秦觀（二十六首）、蘇軾（二十二首）、柳

永（二十首）となる。これを『草堂詩余』と比較すると、それぞれ選ばれている数と作品は、一、二首の違いがあるだけで、基本的には同じである。周邦彦の「玉楼春（桃溪不作従容住）」と蘇軾の「念奴嬌（大江東去）」の二首は『草堂詩余』には選ばれておらず、『詞学筌蹄』が別の書物によつて加えたもので、結果的に『草堂詩余』の遺漏を補うこととなったのであろう。

(三) 入選詞調の詞人と作品について。

『詞学筌蹄』に所収の詞調のうち作例が多いのは、「念奴嬌」（十五首）、「浣溪紗」（十四首）、「蝶恋花」（十一首）、「玉楼春」（十首）および「水龍吟」と「賀新郎」（各九首）である。この六調について『草堂詩余』と比べてみると、ただ「念奴嬌」に蘇軾の首句「大江東去」の一首、「玉楼春」に周邦彦の首句「桃溪不作従容住」の一首、「賀新郎」に劉過の首句「睡覚鶯啼曉」の一首が欠けているだけで、選ばれている詞の詞人と作品は基本的には同一である。

(四) 両書に見える誤りについて。

唐宋人の詞にはほとんど詞題は附いていないが、『草堂詩余』ではしばしば勝手に「春情」や「秋恨」などといった詞題を詞牌下に加えている。『詞学筌蹄』は、それらをそのまま引くだけでなく、『草堂詩余』中の分類である「春景」「初春」といった項目名までも、詞題として用いている。

『草堂詩余』における詞人名の表し方は、一部は名を書き、多くは字や号を記すなど、統一がはかられていない。『詞学筌蹄』はこれについても『草堂詩余』の記載をそのまま使用しているが、さらに新たな誤りを追加している例もある。たとえば、宋から金に入った詞人・呉激、字は彦高について、『草堂詩余』は呉彦高と記しているのに、『詞

『学笈』では中間の「彦」字を漏らし、「呉高」と表記しているのである。

『草堂詩余』に存する比較的大きな問題点は、作品と作者名との組み合わせに多くの誤りが見られるという点であり、もちろんこれについても『詞学笈』はその誤りを訂正することができていない。たとえば、『草堂詩余』前集巻上に録されている欧陽脩「瑞鶴仙（臉霞紅印枕）」は、『詞学笈』巻四においても欧陽脩の作とするが、実際は『絶妙好詞』巻一に見えるように陸淞の作品である。さらに『草堂詩余』後集巻下の秦觀「蝶恋花（鐘送黄昏鵝報曉）」は、『詞学笈』巻三も秦觀の作品としているが、『唐宋諸賢絶妙詞選』巻三に見えるごとく王詵の作品である。また『草堂詩余』には、詞調と詞題の下に作者名を記していない例もある。この場合、二種類の解釈が可能である。一つはそれが無名氏の作であり、作者名が分からないものであるという解釈、もう一つは、前の作品と同一の作者であるので作者名が省略されているという解釈である。『草堂詩余』の作者名を記していない例を調べてみると、この両様の場合が見られるのであり、これは混乱を招きやすい。『詞学笈』における作者名の状況を見ると、『草堂詩余』に名の無い作品は前の作品と同一の作者であるとみなしていることが明らかである。たとえば、『草堂詩余』前集巻下に晏幾道の「生查子（金鞍美少年）」詞を録し、その後の七首には署名が無い。この七首のうち「菩薩蛮（南園满地堆輕絮）」は温庭筠の作であり、『花間集』の巻一に見える。また「浣溪紗（錦帳重重卷暮霞）」は秦觀の作で『淮海居士长短句』巻中に見え、「浣溪紗（永満池塘花満枝）」は『樂府雅詞』巻中に見えるように趙令時作である。だが『詞学笈』は、みな晏幾道の作として収録しているのである。つまり『詞学笈』は、手本通りに瓢箪を描きたかったのに、逆に意外にも手本から離れてしまったのだ。およそ両書において異なる部分は、しばしばこのような状況から生み出されており、別に基づくところがあったということではない。

以上に述べてきた種々の点からみて、『詞学筌蹄』が基づいたのは『草堂詩余』一書のみであり、その編纂方法は、『草堂詩余』に収められている詞を、詞調によって並べ替えて編集し直したものである（もちろんすべての作品とすべての詞調ではないが）と言うことができる。『詞学筌蹄』は、現存する最初の詞譜として、必要な要件を備え詞譜の体例を後世に示したことについては評価すべきである。だが、その編纂態度や方法からみるならば、規範とするには不十分な書物であること、明らかであろう。

注

- ① 鄒祇謨『遠志齋詞衷』、唐圭璋編『詞話叢編』、中華書局、一九八六年、六五八頁に見える。
- ② 唐圭璋『歷代詞学研究述略』、唐先生著『詞学論叢』、上海古籍出版社、一九九〇年、八一六頁に見える。
- ③ 宛敏瀛『詞学概論』、上海古籍出版社、一九八七年、一三七頁に見える。
- ④ 文淵閣本『四庫全書』集部六、別集類五『翠渠摘稿』の巻首提要。『四庫全書』所収書の巻首提要と『四庫全書総目』に所収の同じ書物の提要とはしばしば異同があるが、この『翠渠摘稿』の提要にも双方に異同が見られる。
- ⑤ 『四庫全書総目』子部芸術類、周瑛『書纂』の提要。
- ⑥ 『四庫全書』の『翠渠摘稿』提要を参照。
- ⑦ 詞学家の邱鳴皋先生からうかがったお話によると、以前『詞学筌蹄』の毛辺紙印本を見たことがあるが、具体的にどの図書館で見たのか、またそれが何時頃の刊本であったかなどについては思い出せない、とのことであった。ここではこの説を紹介するのみにとどめ、今後その存在が明らかになることを待ちたい。

- ⑧ 王洪主編『唐宋詞百科大辭典』、学苑出版社、一九九〇年、五九二頁。（なおこの『唐宋詞百科大辭典』所収の蔣哲倫氏執筆部分は、蔣哲倫『詞別是一家』（上海社会科学院出版社、二〇〇五）に「詞籍札瑣」として収められている。）
- ⑨ 王兆鵬・劉尊明主編『宋詞大辭典』、鳳凰出版社（元江蘇古籍出版社）、二〇〇三年、八八九頁。（この条は、錢建狀氏執筆。）
- ⑩ 清・馮金伯輯『詞苑萃編』卷二十三所引。中華書局、一九八六年刊の『詞話叢編』二二五三頁。